

明大寺と東山

名古屋大学理学研究科長

近 藤 孝 男

助手になったころには無限にあるかと思われた研究期間も、そろそろ先が見えてきて、残りの時間で何ができるのかと考えるようになってきた。とはいえ、今は、そんなことも考えても、取り組む時間がない状況にあるのだけれど。ところで、僕のこれまでの人生は地理的にみると随分と狭い範囲で収まっている。外国を除けば、半径 25km の外で生活したことがない。積算すると明大寺が 22 年（中高校＋基生研）、東山が 23 年（学部・大学院＋教員）でほぼ同じである（他は子供のころ）。こんな話をすると研究室の若い人から「土着民」などと言われ、東京出身の家内からは地元に着くのはずるいなどと言われる。しかしこれは意図したことではなくほとんど偶然の結果である。基生研の助手にしてもらった経緯もほとんど偶然のように決まったことだし、名大に戻ったのも、あちこちへと応募書類を出した結果、唯一名大がオファーしてくれたからにすぎない。

土着民人生はいかにも単調で、いささか寂しいようにも見える。実際、様々な遍歴の話を聞くと羨ましい気もする。おまけに研究の方も似たような事情で、大学院以来、生命科学のごく狭い範囲しかしてこなかった。しかし、東山と明大寺での生活は充分異なっており、私には充分刺激的であったし、研究の方だって、狭い分野なりに、充分楽しんできたと思う。そうした中でも 2 回目の明大寺の 17 年間、特にその初期は単調どころか今思い出してもわくわくするようなものだった。創設時の基生研に参加できたことで、あたかも井戸の蛙がはじめて外に出たかのように、世界が広がり、多くの方々と知り合うことが出来た。

名大のオーバードクターだった 1977 年の暮れに突然、指導教官だった太田先生に呼ばれ、やがて岡崎に出来る新しい研究所に移ることになるのでそれを手伝って欲しいと言われた。いずれ助手になれるだろうとも言われた。岡崎に「キセイケン」とよばれる研究所が出来ることは知っていたが、カタカナで書くのが適当なぐらいの認識だった私は、いかにも頼りない返事をし、とりあえず来年研究とは別のことで 3 ヶ月留守にしていいか、と聞くことが精いっぱいだった。研究室で先輩に報告すると、それは「地理的な事情」による抜擢だから断わってはならないと言われ、数日後、中学と高校を過ごした懐かしい明大寺へ 10 何年ぶりに出かけることになった。久しぶりの明大寺だったが、岡崎高校の裏に広がっていた林が全く消失していたのにまず呆然とした。高校の時はその林を通して浄水場まで行くのが土曜の放課後の楽しみだったのに。

さて、気を取り直して金谷先生に会った。よく来た、と言われたことを覚えているが、後は目も眩むような金額を言われ、これを 3 月までに使い、研究室を整備しなさい。それから人工気象室の整備も頼むといわれ、さらにその倍の金額を言われ、また呆然とした（後で圃場も追加となった）。翌

日からが大変だったが、先に述べた3ヶ月のお暇の準備もあって、僕の人生でも最も忙しい半年だったと思う。そんな中で慌ただしく仮設の研究室を整備し、後は先生にお願いし、6月に出発することが出来た。そして、3ヶ月後、明大寺に戻り助手の辞令をもらうこととなった。

人生にはなんだか、苦勞の多い準備が終わり、新しい仕事を始めようとする幸せな時が訪れるものだ。3ヶ月前、カラコルムのベースキャンプに着いて、気の合った仲間と40日間の食糧を前に同じ気持ちを味わったが、それが終わり、これからここで再び研究を中心にした生活が始まるだろうという予感に、充実した気持ちになったことをよく覚えている。とはいえ、現実の場所は仮庁舎とよばれる古い3階建ての建物で、そこに基生研と生理研のそれぞれ3つの部門と機構長、所長のオフィス、倉庫などが詰め込まれていた。従って各部門は極端に狭く、境も無いに等しい状態であったが、全員がここで始める研究に夢を共有していた。

基生研の3部門は生殖、細胞機構、情報制御(内容は計時機構となる予定)で、生殖は金谷、長浜、白井、岸本さんが、細胞機構は神谷、黒岩、吉本、小川さんが既に常駐していた。情報制御は客員部門だったので、生理研の村上さん、古家さん、久木田さんや大型スペクトログラフの渡辺さんと同様、助手一人だけであった。一人ではいささか心細いのだが、部門間の境も無いに等しい物理的環境も幸いし、いつも皆さんと一緒にさせて頂いた。実際、昼は機構長、所長も一緒に全員で弁当を食べ、夕食も皆で東岡崎駅周辺をめぐり歩く生活だった。あの頃の店は今はどうなっているのだろうか。情報制御(計時機構)は居室も実験室も通路の奥に位置していたので、出入りはいやでも生殖、細胞機構を通ることになり、いきおい寄り道をする機会が増えた。特に、夜、金谷先生や神谷先生の部屋の前を通る時は要注意で、一度目が合ったりすると、名古屋まで帰れなくなることがしばしばだった。しかし、こうして両先生から研究とその生活についての話がきけたのはたいへん幸運なことだった。両先生の当時の歳に近くなった今、自分があのように若い人に接していただけるかと自問すると、情け無い気持ちになる。

基生研や生理研の創設は私のような団塊の世代が学位をとって研究を始める時期と重なっており、当時の助手やポスドクはほとんど同じ世代で、その多くは東岡崎駅周辺徘徊の仲間であった。今から考えると、出身も分野もさまざまであるが明大寺で新しい生物学を始めることを共有する同世代が、一種の共同生活を強いられる状況は稀有だったかもしれない。そんな状況は2-3年に及んだが、その一人であったことも私の人生の大きな幸運の一つだったと思う。こうした揺籃期をすぎ、各部門のスペースや人口も増え、境界もはっきりして、自然と研究室単位の生活に替わっていった。しかし、しばしば開催される研究会やコンファレンスの後の懇親会には、そのテーマとは関係なしに全員が集まる習慣が続いていたし、フリートークという自発的な集まりもあった。私の明大寺の生活はさらに10年以上続くのだが、そうした雰囲気もあって自分の興味に忠実に研究を進められたことに大変感謝している。